

親子活動のあり方に関する研究 ～発達障害児とニュースポーツ体験活動をとおして～

竹森 裕高

(西九州大学短期大学部 幼児保育学科)

(令和6年2月5日受理)

Research on parent and child activities
～Through new sports experience activities with children with developmental disabilities～

Hiroataka TAKEMORI

(Nishikyushu University Junior College Department of Early Childhood Education and Care)

(Accepted February 5, 2024)

Abstract

There is a difference in the experience of children with developmental disabilities in terms of exercise and sports experience compared to children with typical development. Among them, parent-child recreation activities were conducted for parent and child of children with developmental disabilities through new sports experiences, and the practical reports were made. In addition, we investigated parents' thoughts on parent and child activities and examined the nature of parent and child activities. Interest in parent and child activities is high, and opportunities to participate are sought, and the significance of new sports experiences is considered to be very high because they are easy to experience and provide opportunities to learn about new sports.

Key words: 親子活動:Parent and Child activities
発達障害児:Children with Developmental Disabilities
ニュースポーツ:new sports

1. 緒言

2020年より全世界に蔓延した新型コロナウイルス(COVID-19)は、2023年5月8日から「5類感染症」に引き下げられたことに伴い、徐々にコロナ禍前の生活に戻りつつある。これまでは新型コロナウイルス感染拡大の影響により、手指消毒やマスクの着用、三密の回避など、日常生活のあり方が大きく変わり、外出自粛や学校の休校、在宅勤務により、家で過ごす時間が増え、「おうち時間」での過ごし方が注目され、家族の絆や親子の絆を再確認する機会となったのではないだろうか。

一方で、運動・スポーツのあり方やイベント事業のあり方等において、新しい形での実施、開催を求められるようになってきている中、徐々にイベントが開催され、賑わいを取り戻しつつある。しかしながら、そのような状況においても、家族は一番身近な集団であり、多くの時間を共に過ごすことには変わらないといえよう。

発達障害児においては、定型発達の子どもと比べ、日常生活体験に差がみられ、運動・スポーツの体験においても差がみられるとされているが、平成29年度スポーツ庁「地域における障害者スポーツ普及促進事業(障害者のスポーツ参加促進に関する調査研究)報告書」(笹川スポーツ財団, 2018)では、障害児・者の週1日以上運動・スポーツ実施率は健常者よりも低い結果となっており、若年層のスポーツ非実施率の割合も上昇傾向を示し、スポーツを実施しない若年層への対策が重要と述べている¹⁾。

N短大部では様々な親子支援活動を実施しており、発達障害のある子どもとその保護者に対して実施している余暇支援活動はその一つである。

そこで、今回は発達障害のある子どもとその保護者を対象とした余暇支援活動の一環として親子レクリエーション事業を実施した。事業内容はニュースポーツ体験をおして、親子でコミュニケーションを図りながら、喜びや楽しさを親子で共有できる機会を作り、親子でふれあう中で、子どもや保護者にとっての居場所として、また、保護者の子どもへの活動支援のきっかけづくりの一助となる活動を実施した。

本研究では、2022年度に実施した親子レクリエーション事業の実践報告を行うとともに、保護者の親子活動に関する考え方について把握し、今後の親子活動のあり方を検討することを目的とした。

2. 方法

(1) 対象

親子レクリエーション活動は2回実施し、第1回は2022年8月にK少年自然の家にて開催した「夏のレク

リエーションキャンプ」、第2回は2023年1月にN大学Sキャンパスにて開催した余暇支援活動「ぼっぼ」に参加した親子を対象とした。参加した子どもは幼児から小学生と幅広く、第1回は親子9組24名、第2回は親子11組26名が参加し、参加者の中には2回とも参加をした親子もいた。

(2) 活動プログラム

親子レクリエーション活動では、ボッチャやフライングディスクなどを用いたニュースポーツ体験を取り入れた親子レクリエーション活動を実施した。活動内容については表1のとおりである。

表1 親子レクリエーション活動プログラム内容

	第1回 「夏のレクリエーション キャンプ」	第2回 余暇支援活動「ぼっぼ」
実践日	2022年8月6日(土)・7日(日)	2023年1月21日(土)
会場	K少年自然の家	N大学Sキャンパス
活動時間	6日:60分・7日:90分	60分
体験内容	ボッチャ フライングディスク ラダーゲッター リング・キャッチ じゃんけんゲーム	ボッチャ フライングディスク ラダーゲッター リング・キャッチ モルック マンカラ

第1回は、2日間ともにニュースポーツ体験活動の時間を設け、初日は子どもを対象に体験をおして、用具の使い方や遊び方を理解することを目的とした。2日目は親子活動として展開し、じゃんけんゲームなどを用いて親子でふれあいながら、興味のある種目を自由に体験したり、記録に挑戦したりしながらプログラムを実施した。

第2回は、親子活動として展開し、第1回と同様に、興味のある種目を自由に体験できるプログラムで展開した。第1回では実施できなかったが、ニュースポーツとして「モルック」を取り入れた。また、体を動かす種目だけでなく、知的なゲームである「マンカラ」も取り入れた。

活動をするにあたり、学生スタッフにはニュースポーツのルール等について体験をおした事前指導を行い、参加者には当日、口頭での説明と遊び方の資料を配付した。

ニュースポーツとは、野球やサッカー、バスケットボールなどの競技スポーツと異なり、年齢や体力にかかわらず誰もが気軽に楽しめるスポーツとして、新しく考案されたスポーツである。ニュースポーツの特性としては、競い合うというより楽しむスポーツとしての捉え方の中で、ルールもやさしく誰もが挑戦しやすいスポーツとして注目されている。今回実施した種目の特性や主なルールは表2の通りである。

表2 ニュースポーツの特性

種目	特性
ポッチャ	・バラリンピックの正式競技 ・2色(赤、青)のボールを投げ合い、ジャックボール(白)からの近さで点数を競う ・個人戦やペア戦などがある
フライングディスク	・ディスクゴルフやディスクドッチなど11種目ある ・個人種目や団体種目がある
ラダーゲッター	・ターゲット型の種目 ・紐についたボールを投げ、ラダーにかかる ・得点を獲得 ・先に21点になると勝利
リング・キャッチ	・お互いのリングを投げ、キャッチする ・複数のリングを投げ、キャッチした数が得点となる ・ペアやチームで行う
モルック	・フィンランド発祥の種目 ・モルックを投げ、スキットルが倒れると得点獲得 ・先に50点になると勝利

前述のように親子活動ではニュースポーツ体験を実施した。プログラムを検討するにあたり、各種目の従来のルールを踏まえつつ、参加者の状況に合わせたルールを独自に設け、実施することとした。今回実践した各種目の遊び方について、第1回は表3、第2回は表4の通りである。第2回は会場の違いもあり、ニュースポーツの変更を行った。また、第1回の活動状況を踏まえ、ルール等の変更も行った。

また、第1回のみ参加者にスタンプラリーカードを配付し、「各種目で1回体験するたびにシールを貼ってOK」とした。

表3 第1回実践内容

種目	遊び方
ポッチャ	☆親子で対戦! ・赤ボールと青ボールをそれぞれに分かれ、1人3回ずつ投げる ・ジャックボールに近い色のボールの勝ち
フライングディスク	☆親子で挑戦! ○ディスクゲッター9 ・1人3回ずつ、ペアで6回投げた合計点を記録する ・得点のつけ方: 得点① 的にヒットで1点、ビンゴで+3点 得点② 投げる場所で得点を変動 ○ディスクゴルフ ・1人3回ずつ、ペアで6回投げた合計点を記録する ・得点のつけ方: 得点① カゴの場所で点数が異なる 得点② 投げる場所で得点が増
ラダーゲッター	☆親子で挑戦! ・1人3回ずつ、ペアで6回投げた合計点を記録する ・得点のつけ方:得点① ラダーの場所で点数が異なる 得点② 投げる場所で得点が増
リング・キャッチ	☆親子で挑戦! ・3個以上のリング(最高5個まで)をペアに向かって投げる ・投げる距離は、ペアで決める ・ペアで交互に3回ずつ投げ、計6回の合計点を記録する

表4 第2回実践内容

種目	遊び方
ポッチャ	☆親子で対戦! ・6球ずつ交互に投げ終わったら、点数確認 ・勝敗:ジャックボールに1番近い色のボールに得点が入り、勝利 ・得点のつけ方:相手の1番近いボールより内側にある自分のボールは全て得点となる
フライングディスク(ディスクゲッター9)	☆親子で挑戦! ・ペアで交互に5球ずつ(計10枚)投げる ・何ビンゴできたかに挑戦する
ラダーゲッター	☆親子で挑戦! ・青色と黄色、それぞれ3球ずつ(計6球)投げる ・得点:ラダーにかかる得点ゲット ・合計で何点取れるか挑戦する
リング・キャッチ	☆親子で挑戦! ・3個以上のリング(最高5個まで)をペアに向かって投げる ・投げる距離は、ペアで決める ・合計16点以上になったらクリア
モルック	☆親子で挑戦! ・ペアで3回ずつ(計6回)投げる ・得点のつけ方: 2本以上倒れた場合→倒れた本数が点数 1本倒れた場合→数字が点数 ・合計得点が25点になったらクリア

今回、ニュースポーツを体験するにあたり、競技性よりも体験を重視した。また、他の親子との対戦や競い合いはせず、親子で競ったり、一緒に記録を目指したりする体験として位置づけた。そのため、各種目独自ルールを設け、参加者の状況を踏まえ、参加しやすいように独自ルール自体も強制はせず、参加者の自由な発想を尊重した。

(3) アンケート調査

参加した保護者に対して活動参加後にアンケート調査を実施した。アンケート内容は参加した親子活動についての質問項目に加え、親子活動に対するイメージなどについても質問した。第1回参加者からは6名、第2回参加者からは5名の回答を得た。調査については、同意を得られた場合のみ回答を得るようにし、無記名で実施した。なお、調査は西九州大学短期大学部研究倫理委員会の承認を得て実施している(承認番号 22NTD-03)。利益相反が生じる内容も含まれない。

3. 実践成果

(1) ニュースポーツ体験活動

第1回の活動では、初日は子どものみの体験活動を実施した。子どもたちは学生スタッフのサポートを受けながら、各種目を体験した。各種目の遊び方について理解しやすい種目もあれば、理解が難しい種目もあり、始めは戸惑いをみせる様子もみられた。何度も体験する中で、子どもたちは徐々に用具や遊び方に慣れていく様子も伺えたが、最後まで難しさを感じている子どもの姿もみら

れた。

2日目は親子での体験活動を実施した。保護者に資料を配付し、ニュースポーツについて説明を行ったうえで、活動を実施した。親子でどの種目に挑戦するか話をしながら、各種目を体験する様子がみられた。子どもたちが前日に体験していたことや活動前にじゃんけん遊びでコミュニケーション・ワークを実施したことで親子体験活動へスムーズに入ることができたと考えられる。

第2回の活動でも、保護者に資料を配付し、ニュースポーツ種目の説明を行い、親子での体験活動を実施した。参加者は通常の「ぼっぼ」とは異なる環境の中でもニュースポーツ体験を楽しむ様子がみられた。

各種目の活動の様子に目を向けると、「ラダーゲッター」はいずれの回でも人気のある種目であった。ボールについている紐を持って投げる種目であるが、投げる難しさを感じながらも、ボールが回転する動きを不思議に感じ、ラダーにそのまま掛かったり、バウンドして掛かったりすることを面白い様子が伺えた。

「フライングディスク」はディスクゲッター9やディスクゴルフの的に向かって投げる種目であるが、自分の好きな距離から投げて楽しむ様子が伺えた。しかしながら、ディスクゲッター9は当たっても的が落ちないこともあり、途中から手でたたいて的を落とす様子もみられた。

「ポッチャ」や「モルック」はそれぞれ点数を取り合いながら競う種目であるが、親子で対決する以外にも、兄弟や他の参加者と対決する様子がみられた。

「リング・キャッチ」は複数のリングを投げてキャッチする種目であるが、全てのリングをキャッチすることは難しく、他の種目と比べ成功体験を味わう機会が少なく、数回体験して終わる親子が多くみられた。

全体的な活動の様子については、子どもにとっても、保護者にとっても初体験となる種目もあり、各種目の遊び方を理解するのに時間がかかり、開始時は戸惑いがみられることもあったものの、回数を重ねるうちに徐々に親子でニュースポーツを体験する様子が伺えた。

今回実施した種目はターゲット型が多く、点数のつけ方などを理解することに難しさも感じつつも得点を獲得したり、勝負に勝ったりして喜ぶ様子がみられた。

また、全種目を体験する親子もいれば、1つの種目に集中して体験する親子の姿があったが、ニュースポーツ体験自体に興味を示さず、他の遊びを行う子どももあり、親子での活動に個人差がみられた。

保護者においても、積極的に子どもと一緒に体験する保護者、子どもの活動を見守る保護者とみられた。また、サポートについている学生も一緒に体験する様子も伺えた。

(2) 保護者アンケート結果

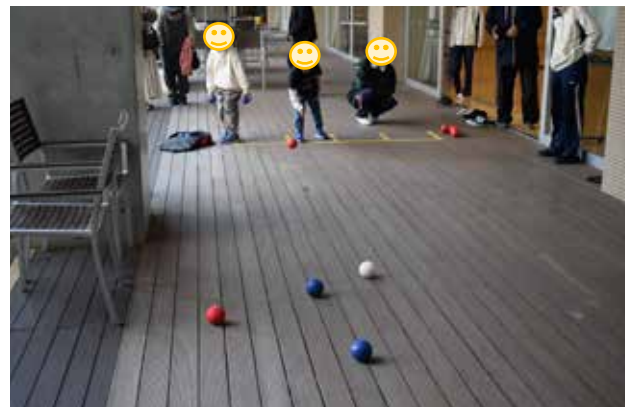
親子レクリエーション活動に参加した保護者に対して実施したアンケート結果を報告する。

1) 第1回参加者アンケート結果

第1回親子レクリエーション活動に参加した保護者のアンケートをみると、『親子レクリエーション活動』と『活動をとおしての親子の会話』に関する項目では、「とても楽しかった」「楽しかった」と回答した人は5名みられ、親子の会話については2名が増えたとの回答がみられ、一定の評価を得ることができ、参加者はニュースポーツ体験をとおして、親子でコミュニケーションは図れていたと思われる。しかしながら、1名のご家庭は「あまり楽しくなかった」と回答しているのに加え、普段よりも会話が減ったとの回答がみられたことも目をそらしてはいけない。今回の結果となった要因は様々考えられるが、今回の活動内容や活動の展開方法などが参加者に合っていなかったことが考えられ、反省点として課題が残った。

『楽しかったニュースポーツ体験』についてみると、ラダーゲッター、ディスクゲッター9の評価が高く、回答者全員が楽しいと感じていることが分かる。ディスクゴルフが続いているところをみるとターゲット型の種目は、1回の投球で「得点が取れる」、「的に当たる」、「カゴに入る」といった成功体験を味わいやすく、その結果達成感につながりやすかったことが要因と思われる。

『子どもの活動の様子』についてみると、「楽しそうだった」「楽しんでいた」など、ニュースポーツを楽しむ様子を感じることができた。また、体験することで「もっ



と上手になりたい」という気持ちが出たことで投げ方や投げる場所を工夫しながら挑戦する姿も伺えた。

しかしながら、ルールや要領の難しさや苦手意識が強く、参加意欲が低く「一通り行って終了した」との回答もみられた。(表5)

表5 子どもの活動の様子について(第1回参加者)

ルールが難しいと理解できないので基本的に違う遊び方をしました。
とても楽しそうでした。やってみるともっと上手にやりたい!と思ったようで投げ方、投げる場所など色々工夫しながら何回も繰り返し挑戦していました。
最初は乗り気ではなかったが、ご褒美があることでやる気が出た。また、実際に体験してみて自分の興味がありそうなものが多く楽しかった模様。
5種類のニュースポーツのうち、ポッチャは初めからやりたくない一度もやらなかったが、フライングディスクは好んで1日目は何度も取り組んだ。2日目のレクの時間は、得点出来たことを喜んだりしていたが、活動の途中でお友達の順番を飛ばしてしまった事を言われて、早く部屋に帰りたい気持ちになった。それぞれ一回ずつしてシールを貰うとお仕舞いになった。
日頃から、競争・競技などに対して苦手意識が強く、今回もニュースポーツの時間をそのように捉えていたようで、参加意欲がありませんでした。先生方に色々な声掛けて誘っていたきながらペーリングキャッチ以外は何とか取り組み、シールをあつめることができました。
ポッチャは放課後デイサービスなどでも経験があり楽しそうに取り組んでいました。フライングディスクは投げる要領が掴めず、的に届かずに手の届く位置から投げたり直接パンチしたり。その場は楽しめていました。

『親子活動を体験してみたの感想』についてみると、「親子で楽しむことができました」、「ルールの縛りがなく、子どもは体験しやすかった」、「経験の有無に関係なく楽しめる活動だった」、「子どもの何度も挑戦する姿や工夫する姿に成長を感じた」などといった肯定的な感想が多くみられた。

また、要領の難しさを否定的に捉えず、子どもの遊びの経験として必要と感じる保護者や体験をとおして興味が高まりニュースポーツの用具を購入したとの回答もみられた。(表6)

表6 親子活動体験の感想(第1回参加者)

見慣れない道具を使うと、私たちが想像できない使い方をすることでゲームと関係なく楽しかったです。
親子で1時間半、休みなく楽しみました!子供が何度も挑戦する姿や、工夫してやっているのを見て成長を感じました。
絶対に全てを回らないといけないとか、絶対にここから投げないといけないなどの縛りがなく、子供は体験しやすかったと思う。また全員で競うものでもなかったのがよかったと思う。
ニュースポーツは初めてでしたが、いつもと違う事を親子で一緒に楽しめて良かったです。普段の親子遊びは子どもの好きな事を自分のペースやルールですので、今回のように準備設定された場面では気持ちがあがらず参加しない事もあり、子どもがやる気になったのでほっとしました。
ルールから外れた場面は多々ありましたが、先生も臨機応変に点数をつけてくださるなど、最後は「すごいよ、よく出来たね～」で終わりました。フリスビーをやたらOBさせて喜んでましたので、聞いたら「欲しい」と。早速購入してきました。フリスビーキャッチから遊んで見たいと思います。
私にとっては全部が初めて触れた競技でした。要領が掴めれば競技経験に関係なく楽しめる楽しい活動でした。息子にとってはディスクを投げる要領、ラダーを投げる要領が難しかったようで、こういう遊びを積極的にさせてあげると良いのだなと気づかせてもらいました。

第1回のアンケート結果から振り返ってみると、親子でのニュースポーツ体験をとおして、子どもの新たな姿や新しい遊びの発見など、非常に肯定的に捉えている保護者が多いことが伺えた。しかしながら、楽しむことができなかった参加者がいたことやルールを難しく感じた参加者もいたことは課題であり、活動内容の選択や展開方法で工夫や配慮が必要と思われる。

2) 第2回参加者アンケート結果

第2回親子レクリエーション活動に参加した保護者のアンケートをみると、第1回に引き続き参加した方は、回答者5名中3名であった。

『ニュースポーツ体験』については全回答者から「とても良かった」「良かった」と評価を得ることができた。

『体験したニュースポーツ種目』についてみると、図2のとおりであった。ラダーゲッター、ポッチャ、モルックが最も多い結果となったが、全種目を体験した親子はおらず、第1回と比べ、同じ種目を継続的に体験する親子が多くみられたと思われる。

『子どもの活動の様子』についてみると、「楽しかった」、「楽しそうにしていた」など、ニュースポーツを楽しむ様子が伺えた。また、別の遊びをしていた子どもに対し、保護者が先に体験し、子どもへ声をかけて体験を促す様子も伺えた。(表7)

表7 子どもの活動の様子について(第2回参加者)

とても楽しかったようで、長い時間、ラダーゲッターをしていました。
やり始めたら楽しそうにしていた。誰かと競う程までには行かないが、手軽にできて達成感が味わえると思った。
初めは面倒くさがってわざと自転車で遊んだりしていましたが、私がひとりでモルックを体験していると近寄ってきました。お母さんには難しいから助けて!とヘルプしたら自転車を降りてモルックの体験を始めました。やってみると楽しかったようで、子、母、学生さんとトーナメント対戦を楽しんでいました。
新しい遊びに興味津々で、色々やってみていた。
とても楽しんでいました

『親子活動を体験してみたの感想』についてみると、「ルールもわかりやすく、すぐに取り組めてよかった」、「母としては外遊びに興味を持ってくれるきっかけになるといいなと感じました」、「頭も体も使って会話をしながら楽しめたのがよかった」などが挙げられ、全体

表8 親子活動体験の感想(第2回参加者)

勝敗にこだわる息子に、手加減しながらするのは、難しかったが、点数が取れなくても、楽しめた。簡単に出来るし、ルールも分かりやすいので、すぐに取り組めてよかった。個人でも、競えるところも良いと思った。
年齢や経験を問わずできるもので、よかった。子どもがやると、また新たな遊び方に発展するのが面白かった。
単純なルールなので、運動音痴の私にも子を誘いやすかったですし、ポイントの木が倒れたときの爽快感を母子ともに感じる事ができました。母としては外遊びに興味を持ってくれるきっかけになるといいなと感じました。
頭も体も使って会話をしながら楽しめたのが良かった。
体も頭も使うのがいいなと思います 幼稚園や小学校のクラブ活動などにも取り入れてほしいです

的に肯定的な感想が多かった。(表8)

第2回アンケート結果から振り返ると、第1回と同様、ニュースポーツ体験を楽しむ子どもの様子や全体的に肯定的な評価を得ることができた。

活動の様子として、第1回と比べ、同じ種目を何度も体験していることが伺えた。これは第2回ではスタンプラリーを導入しなかったことも少なからず影響したのではないかと考えられるが、子どもが当該種目の楽しさや面白さといった魅力を体験することで味わうことができたことも要因と考えられる。

3) 親子活動に関する保護者の意識

今回実施した親子活動を継続していくために、親子での過ごし方や親子を対象とした活動に対する保護者の意識に関するアンケート結果を報告する。

『普段の親子で遊んでいる頻度』については、「週に5,6日」は2名であり、週1日以上でみると4名であった。しかしながら、「全く遊んでいない」と回答した保護者が1名いた。

親子で遊ぶ頻度が少ない要因として、親子で一緒に遊べる時間の確保が困難や子どもが好きなおことで遊ぶことを優先といった理由が考えられるが、今回の調査では回答を得ることはできていない。

また、『親子で過ごすときに困っていること』については、最も多かった回答は「遊びの内容がいつも同じになる」ことであり、「ただただと過ごしてしまう」といった回答が続いた。その他の回答として、「ルール説明が伝わらず、自分がさじを投げてしまう」や「楽しそうなイベントがないと外出しない」といった回答があった。

(図1)

保護者の困り感として最も挙げられた「遊びの内容がいつも同じになる」ことは、子どもの興味関心や成功体験により内容が絞られていった結果と考えられる。また、新しい遊びをする際はルール等の説明が必要となってくるが、難度の高い内容の場合、理解する時間が必要となってしまう遊ぶまでに時間がかかり、子どもの遊びへの興

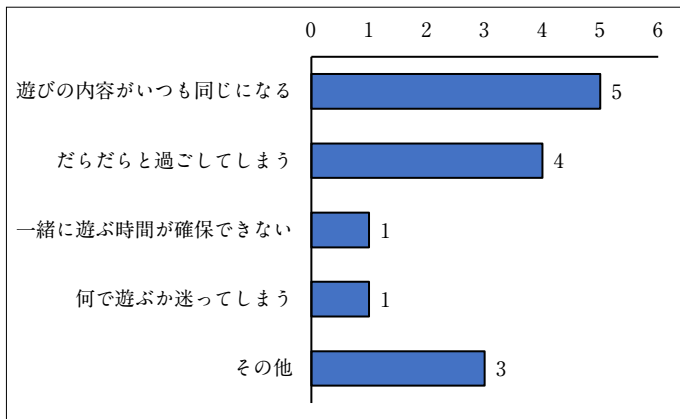


図1 親子で過ごすときの困り感について

味がなくなるといった悪循環に陥り、遊びの選択肢から外れてしまった結果、内容が固定化されてしまうのではないかと考えられる。

また、「ただただと過ごしてしまう」要因としては、子どもの気分に影響されることもあるだろうが、遊びが同じになってしまうことで、充実感が継続されず子どもの興味関心に影響を及ぼしていることも要因として考えられる。

『親子活動イベントへの関心度』については、保護者全員が「とても関心がある」、「関心がある」と回答し、「親子活動イベントへの参加」については、「積極的に参加する」が5名、「都合が合えば参加する」が1名と参加する意思がみられた。

参加する理由としては、「家よりもゆっくりと子どもと向き合える」、「いつもと違う活動ができるから」、「年齢が上がるにつれ、親子で一緒に何かをする機会が減っていくと感ずるため」などが挙げられ、保護者は親子活動イベントを家での生活とは違った環境の中で遊ぶ機会として捉えていることが伺える。(表9)

表9 親子活動イベントに参加する理由

家で過ごすよりもゆっくり子供と向き合える。 人の目があると子供はがんばれる。
年齢が上がってくると、だんだん親子で一緒に何かをする機会は減ってくるんだなあと感じているため。
楽しそうだから。
いつもと違う活動ができるから。
今まであまり参加経験がありませんので、これから少しずつ増やしていけたらと思っています。
私自身が運動音痴だから遊び方の教え方が分からない。 近所のお友達付き合いもなく子供同士で遊びを覚える経験がほとんどない。 息子にも体を動かす楽しさを味わわせたい。

これらの結果を踏まえると、発達障害のある子どもを持つ保護者は親子活動イベントへの関心度は高く、参加することへの意識が高いことが伺えた。その理由として、いつも同じ遊びになってしまうことやただただと過ごしてしまうなどといった困り感からも伺える。その中で、いつもと違う環境や楽しそうなイベントが子どもの興味・関心を高めるきっかけになると感じる保護者がみられる。

このような親子活動を実施する際に参加しやすい内容について調査したところ、「自分の好きなように体験できる内容」や「体験を中心とした内容」が参加しやすいとの回答が最も多かったが、「グループ活動を中心とした内容」や「ルールやスケジュールが決まった内容」、「競技性の高い内容」も求めている声も挙げられていることから、今後の親子活動を考えるうえで参考にしていきたい。その他には、「先生からやさしく教えてもらう環境」や「単純なルールで対戦できる内容」といった声も挙げられた。

(図2)

これらを踏まえると、子どものペースで活動できるような環境を求める保護者が多い傾向にあるが、あえてグループ活動といった周りに合わせる必要が出てくる環境に置くことで、子どもの成長や新しい発見を期待しているのではないかと考えられる。

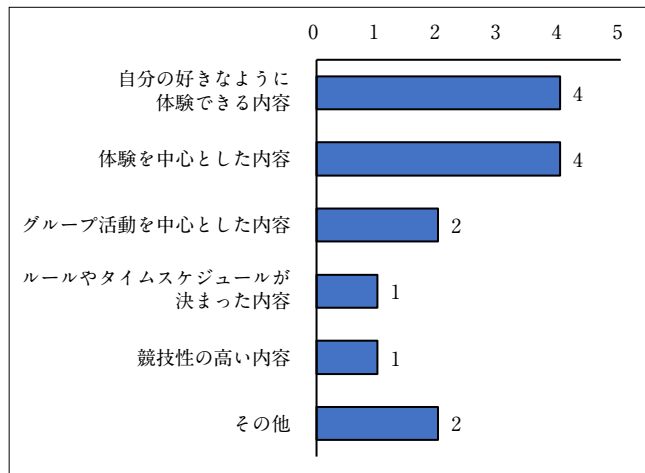


図2 親子レクリエーション活動に参加しやすい内容について

5. まとめ

本事業では、発達障害のある子どもの親子を対象に親子レクリエーション活動を実施した。

子どもの様子として、初めての遊びの中で、興味を持ち積極的に遊んだ子もいれば、抵抗感がありあまり遊べなかった子もみられた。また、遊ぶときにルールを守りながら遊びつつ、慣れてくると自分なりにアレンジして保護者や学生スタッフに提案している様子もみられた。保護者においても、子どもと一緒に楽しむ姿もあれば、子どもの活動を見守る姿もあり、様々なかかわり方がみられた。

保護者からは、「子どもの新しい発見にもつながった」「子どもがとても楽しそうだった」「興味が湧いて、その後ディスクを購入した」「外遊びに興味を持つきっかけになってほしい」などの意見が挙がり、肯定的な声が多かった。しかしながら、「ルールが難しかったり、投げ方の要領が難しかった」などの意見もあり、ルールや技術面でももう少しわかりやすく説明できたり、アレンジした遊びの提案などがあると参加者の受け止め方も変わったと思われ、今後の課題である。

保護者に対して親子活動に対する考えを調査した結果は、親子活動に対する関心度は非常に高く、積極的に参加をしようとする意識の高さから、親子活動イベントは非常に重要な役割を担っていると思われる。親子で過ごす中で「いつも同じ遊びになってしまう」「ただただ過ごすしてしまう」といった困り感があることが伺えた。それらを踏まえると、親子活動でのプログラムはイベントだからこそ体験できるプログラムで外に出るきっかけづくりとなる内容や家庭でも気軽にできるプログラムで家

庭で過ごすヒントとなるような内容が望ましいと考えられる。特に今回実施したニュースポーツ体験は簡単なルールも多く、誰もが楽しめるという特性から、発達障害のある子どもも体験しやすく、保護者にとっても新たなスポーツを知る機会となり、遊びの選択肢の拡大につながり、ニュースポーツを体験する意義は非常に高いものがあると考えられる。

今回実施した親子活動を踏まえ、親子での活動の場として今後も継続していきたい。また、親子活動のあり方について調査研究を行い、より良い環境づくりができるよう検討していきたい。

6. 謝辞

本研究にご協力頂きました参加者の皆様に深謝申し上げます。本研究は西九州大学短期大学部飯盛研究奨励金(2022)による研究成果の一部であることも申し添えます。

引用文献

- 1) 笹川スポーツ財団(2018)平成29年度スポーツ庁「地域における障害者スポーツ普及促進事業(障害者のスポーツ参加促進に関する調査研究)報告書」
https://www.ss.or.jp/Portals/0/resources/research/report/pdf/2018_report_40.pdf (最終閲覧: 2023年12月26日)

参考文献

- ・ 野中壽子, 滝村雅人, 穂丸武臣, 奥平俊子(2009) 発達障害支援プログラムにおける粗大運動活動の意義, 発育発達研究, 第41号, 58-63
- ・ JSPO Plus(2021) <https://media.japan-sports.or.jp/interview/31> (最終閲覧日: 2023年12月26日)
- ・ 松山郁夫, 中村理美, 永富達也, 井上伸一, 坂本康成(2019) 発達障害児の運動を中心とする自由遊びにおける支援の意義, 佐賀大学教育実践研究, 第38号, 21-30.
- ・ 松尾哲矢(2022)「ゆるスポーツ」からみたスポーツ〈場〉の構造変動と文化変容の可能性, スポーツ社会学研究, 30-1, 37-56.
- ・ 古田康生(2021)子どもを対象としたニュースポーツ・ドッジビーの有効性に関する一事例研究, Leisure & Recreation (自由時間研究), 46, 14-20.